

子どもに「したぎのおやくそく」を教えるためのガイドブック

ヨーロッパでは約5人に1人の子どもが性的虐待を含めた性暴力の被害を受けています。「したぎのおやくそく」は、子どもから性暴力を防ぐための教育的ツールです。

「したぎのおやくそく」

この約束は、他人が自分の身体の中で触ってはいけないところはどこなのか、もし触られたらどのように反応してどこに助けを求めればよいのか、こういったことを保護者が子どもに対して説明するための手助けになるものです。

「したぎのおやくそく」とは何でしょうか？答えは簡単です。通常、下着で隠れている身体のパーツは他人から触られるべきではないという約束です。この約束には、ほかの人に同じことをしてはいけないということも含まれます。さらにこの約束は、自分の身体は自分のものだということ、秘密や接触に良いものと悪いものの違いがあることを子どもに説明するための手助けにもなります。

「したぎのおやくそく」をどのように教えたらよいですか？

この約束は保護者やケア従事者が子どもとの対話を進めることを目的として生み出されたもので、性的虐待を防ぐためのきわめて有効な手段として期待されます。「したぎのおやくそく」には5つの重要なポイントがあります。

1. あなたの身体はあなたのもの

子どもは自分の身体が自分のものであり、自分の許可なく誰も自分に触ることはできないのだということを教えられる必要があります。子どもが幼少期の頃から、性器やそれ以外の身体部分の正しい名前を使ってセクシュアリティや「プライベートな身体部分」に関するオープンで直接的なコミュニケーションを育むことは、何が許されていないことなのかを子ども自身が理解することにつながります。子どもは、キスや接触を拒否する権利を持っています。子どもが愛する人に対しても同様です。不適切な身体接触に対して、子どもは直ちにはっきりと「イヤ」あるいは「ダメ」と断り、安全でない状況から逃れ、信用できる大人に何が起こったのかを伝えることを教えられる必要があります。周りの大人がその問題を深刻なものとして理解するまで、被害に遭った子どもが起こった出来事を諦めずに伝え続けることも重要です。



この絵本では、「おててさん」が毎回キコに触ってもよいかを尋ねています。これに対して、キコは許可を与えます。「おててさん」が下着の中を触ろうとすると、キコは「ダメ！」と叫びます。このストーリーを用いながら、どのような場面においても「ダメ！」と拒否してもよいのだということを子どもに説明してもよいでしょう。

2. 良い接触と悪い接触

どの接触が適切なのか、あるいはそうでないのかを子どもが常に認識できるわけではありません。「他の人があなたのプライベートな場所を見たり触ったりするのはダメだよ」、「他の人のプライベートな場所をあなたに見せたり触らせたりするのもダメなんだよ」と教えてください。そのために、「したぎのおやくそく」は簡単な境界線を設けています。つまり下着です。この「おやくそく」は、大人が子どもと一緒に話し合いをするのにも役立つでしょう。誰かの行動が問題ないかどうか子ども自身が判断できない場合は、必ず信頼できる大人に助けを求めることも教えてください。



この絵本では、下着の中を触ることに対してキコが拒否します。教師、保護者、医師など周りの大人が自分の身体に触る必要がある場合にも、不快に思う場合は「イヤ」と言える勇気を持てるようにすることが大切です。

3. 良い秘密と悪い秘密

性的虐待の加害者にとって、秘密を作ることは常套手段です。それゆえに、良い秘密と悪い秘密の区別を教え、信頼の土壌を醸成することが重要です。不安や不快に感じたり、恐怖や悲しみをもたらすような秘密は良いものではなく、一人で抱え込むべきではありません。保護者、教師、警察、医師など、信頼できる大人と共有すべきものです。



この絵本では、誰かが不適切な方法でキコにタッチしようとしたら声を上げるべきであると「おててさん」はキコを促しています。このストーリーを用いながら、良い秘密（サプライズ・パーティーなど）と悪い秘密（子どもを悲しくさせたり不安にさせたりするもの）の違いを話すきっかけを作ることができるでしょう。悪い秘密は共有するよう、子どもに促すことが重要です。

4. 予防と保護は大人の責任

虐待を受けた子どもは恥ずかしい思いをしたり、罪の意識を持ったり、不安に感じたりします。大人はセクシュアリティに関するタブーを設けるべきではありません。子どもが不安や悲しみを抱えているとき、誰に相談できるのかを子ども自身が理解していることが重要です。被害に遭った子どもは、何か間違ったことが起こったのだと感じているかもしれません。周りの大人は子どもの気持ちや行動に寄り添い、受け入れる必要があります。周りの大人や子どもとの接触を拒絶する場合、それには何らかの理由があるのかもしれません。そのような行動も尊重してください。子どもは常にこの問題について自分の親と話すことができるという理解を共有しているべきです。



この絵本の「おててさん」はキコの友達です。「おててさん」のように、大人は子どもの日常生活を手助けする存在です。性暴力を防ぐことは何よりも大人の責任であり、子どもに責任を負わせるべきではありません。

5. その他の役立つ情報

報告と開示

子どもは自らのセーフティ・ネットワークの中にいる大人の存在を教えられるべきです。信頼できる大人、そばにいてくれる大人、話すことを聞いてくれる大人、助けてくれる大人を子ども自ら選択することができるようになるべきです。セーフティ・ネットワークのメンバーのうち、一人は子どもと同居している必要がありますが、それ以外は近い家族の外にいるメンバーのほうがよいでしょう。こうした信頼できるネットワークから助けを求めることができるようにしておく必要があります。

加害者を知っている場合

多くの場合、加害者は子どもが知っている人物です。小さな子どもにとって、自分のことを知っている人物が虐待しようという事実を理解するのは容易なことではありません。加害者は子どもの信頼を勝ち得ようと様々な手口を使います。子どもに対してプレゼントを渡したり、秘密を守らせようとしたり、子どもと二人きりで過ごそうとする人がいる場合、親に伝えるということを家のルールとしておくべきでしょう。

加害者を知らない場合

加害者が知らない人物である場合もあります。見知らぬ人との接触に関する簡単なルールを教えましょう。知らない人の車に乗らない、知らない人からのプレゼントや招待を受け取らないといったことです。

助けを求める

教師、ソーシャルワーカー、オンブズパーソンズ、医師、学校の心理カウンセラー、警察など、助けを求めることができる大人の存在や、ヘルプラインの存在を子どもに提供する必要があります。

なぜ「したぎのおやくそく」が大切なのですか？

ヨーロッパでは約5人に1人の子どもが性的虐待や性暴力の被害を受けています。これらの虐待や暴力は、ジェンダー、年齢、肌の色、社会階層、宗教の違いにかかわらず起きている問題です。加害者はしばしば子どもが信頼する人物です。加害者が子どもである場合もあります。

あなたの子どもが被害に遭わないために

子どもとの間で良いコミュニケーションを取ることが鍵になります。オープンでまっすぐ率直でありながら、明るく威圧的ではない雰囲気であることが重要です。

「したぎのおやくそく」の活用

この約束を教えるのに早すぎることはありません。虐待はどの年齢でも起こりうるからです。自分の子どもとはこのテーマについて話しにくいと感じるかもしれませんが。しかし、それは子どもにとってというよりも、むしろ大人であるあなた自身にとっての困難であるのかもしれません。

虐待が疑われるときにはどうすべきですか？

自分の子どもが虐待を受けたことが疑われる場合、重要なのは、子どもに対して怒らないことです。何か悪いことをしてしまったのではないかと子どもが感じるようなことをしないようにしてください。いつ誰との間で何が起こったのかを聞いてもかまいませんが、それが起こった理由を尋ねることはしないでください。

子どもの前で怒りを見せないよう心がけてください。子どもが罪の意識を抱えてしまい、必要な情報を口に出すことができなくなる可能性があります。

不十分な情報にもとづき結論を急いで導かないよう心がけてください。子どもに対して、起こった出来事についてはきちんと対応すると言って安心させてください。そのうえで、心理士や子どもケアの専門家、医師、ソーシャルワーカー、警察などに助けを求めてください。性暴力の被害を受けた子どもを支援する専門のセンターやヘルプラインがある場合もあります。子どもが性被害を受けたかどうか確証が持てない場合も、専門家とつながることで次になすべきことの助言を受けることができます。

役に立つ情報や資料はどこにありますか？

欧州評議会は「したぎのおやくそく」を教えるための教材を作成しています。具体的には次のようなものがあります。

- アニメ動画
- 3〜7歳向けの絵本
- ポスターおよびポストカード

これらはすべて次のURLからダウンロード可能です。www.underwearrule.net 「したぎのおやくそく」は、性暴力から子どもを守るための欧州評議会「5人に1人」キャンペーンの一環として展開されています。欧州評議会が推進するその他の予防・保護対策については、次のURLからご覧ください。www.coe.int/oneinfive

